

'07年、15万体のうち司法解剖率はわずか3.8%—
殺人の可能性がある事件でも「自殺」「事故」「病死」
とされてしまう検査の暗部を直撃

「自殺を『否定』する
『証拠』が次々と

対応した刑事課長代理
は、自殺と判断した根拠と
して、「屋上にある1・2
mの柵を自分で乗り越え
た」「隆央さんが精神科に
通院中で、部屋に抗うつ薬
が置いてあった」「争った
ような物音はなかった」こ
となどを挙げた。

その後、私たちは独身寮



愛知県警の開示した現場写真
(上・中)。右端に見えるのが隆
央さんの遺体で、壁際に電池は
外れているが無傷の携帯電話が
落ちていた。警察から返却され
た腕時計(下・遺族撮影)はま
るで手で分解されたようにバラ
バラになっていた

人の姉へのメール発信が3
件分残っているだけで、他の
メール、電話の発着履歴
がすべて消されていました。前
述したように、隆央さんは
死の約6時間前、実家に携
帯電話から『寮に着いた』
と連絡をしていたが、その
履歴も消えていました。

●携帯電話は無傷なのに、
腕時計はまるで分解したか
のように細かい部品までバ
ラバラになっていた(下の
写真)。

結局、遺族が春日井署に
出向いて説明を聞いたの
は、隆央さんの葬儀の後だ
った。

に足を運び、屋上や部屋の
中に何か手がかりはないか
と細かく見て回りました。
そして、気になる箇所を撮
影しました。その結果、ど
うしても納得できないこと
が、いくつか出てきたので
す』(博美さん)

警察の説明と現場の調査

から、遺族が感じた不審な
点は以下の通りである。

●心療内科の主治医による
と、うつ症状は軽度で、自
殺につながるような症状だ
ったとは考えられない。

●隆央さんの部屋の鍵は開
いたまま。メガネは折りた
たんで鍵とともに机の上に

置いてあつた。彼の視力は
0・07と0・05で、と
くに暗闇では、メガネなし
では歩けないはずだった。

●遺体とともに返されたト
レーナーやズボンには、転
落だけでついたとは思えな
い擦り跡や裂けた傷が複数
あつた。

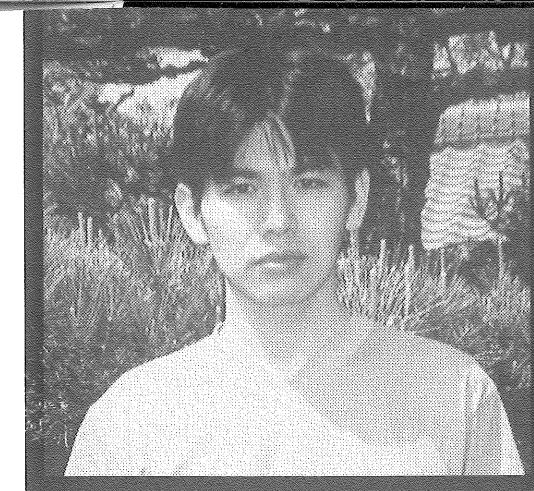
●屋上にある給湯管がとこ
ろどころ凹んでつぶれてい
た。争った跡ではないのか。

●『争った形跡がなく争つ
た声を聞いた者もいない』
とのことだが、30mの高さ
から体重65kgの人間が落ち
た音に気づかないのなら、
争った音や声も聞こえない
のではないか?

そこで遺族は、死の真相
を知るべく、「06年4月、愛
知県警に自殺と認定した搜
查記録に関する個人情報の
開示を請求。1年以上が経
過した'07年5月、ようやく
『死体見分調書』と『写真
撮影報告書』の一部が開示
された。

ところが開示された写真
は、遺体発見直後に現場で
撮影された6枚(上の写真
など)のみ。通常、衣類や
遺体の細部写真も撮ってい
るはずだが、それらはすべ
て『白塗り』の状態だった。

また、途中で書式が手書き
からワープロ打ちに変わ
るなど不自然な点も見られ
た。



亡くなった山本隆央
さん。真面目で寡黙
な青年だったという

短期集中連載

葬られた “変死体” 事件簿

第3回

愛知県警職員「怪死」事件

情報開示を拒み
続ける警察——。
自殺や転落事故死
では説明できな

「履歴が消された 携帯電話」と 「不自然に壊れた時計」

取材・文
柳原二佳
ノンフィクション作家

「私たち、とても仲のよ
かつた弟を亡くしました。
家族全員で、亡くなる数時
間前まで一緒に買い物をし
たり、食事をして過ごして
いました。その弟が、自殺
なんて……。どうしても納
得できません」

そう語るのは、愛知県豊
橋市に住む、柳瀬博美さん
(39歳)、古寺真理子さん
(35歳)姉妹だ。

実弟の山本隆央さん(当

時30歳)が、愛知県春日井
市にある愛知県警寮の10階屋上から転落死したのは、「05年6月6日午前2時ごろのこと。県警は『自殺』と断定したが、遺族は納得できず、弟の死の真実を明らかにするため、独自に調査を行つてきただ。

隆央さんは愛知県警の職員として、情報管理課に勤務していた。真理子さんは隆央さんと過ごした最後の日を振り返る。

「亡くなる前日、私は実家に帰省していた弟と一緒に近くのブルーに泳ぎに行き、昼食後、紳士服店で買い物をしました。弟は『3週間に採用試験の補助員をするんだ』と話し、その日のためにカッターシャツとズボンを新調しました。そして、早めの夕食を済ませた後、普段とまったく変わらない様子で寮に帰つて

いた。しかし、遺族は警察から返却された隆央さんの携帯電話と腕時計の状態を見たとき、大きな疑問を抱いた。隆央さんは30mもの高さから転落したのに、携帯電話は電源が入ったままで傷ひとつなかつた。液晶もカメラもストラップもすべて何ひとつ壊れていない状態だった。

●携帯電話にはなぜか、二

やなぎはら 63年生まれ。交通事故、自動車保険問題などをテーマに執筆活動を行う。'04年からは日本の死因究明制度の問題を追及する記事も発表し続け、犯罪捜査の根幹に一石を投じている。主な著書に『示談交渉人裏ファイル』、『死因究明～葬られた眞実』、『焼かれる前に語れ』、新刊『自動車保険の落とし穴』など多数

いました。「寮に着いた」という電話が本人からあつたのは、午後8時20分ごろ。そのわずか6時間後に、こんなことが起ころんなんでした。隆央さんが寮の屋上から転落して死亡した」という一報が入つたのは、6日前午前4時半ごろのことだった。両親は午前6時50分ごろ、春日井警察署で変わりはてた隆央さんと対面した。隆央さんの遺体は車庫のコンクリート床に敷かれたブルーシートの上に全裸で置かれていたそうです。午前9時ごろ、医師から死因を「自殺」とした死体検案書を渡されたのです』(博美さん)

しかし、遺族は警察から返却された隆央さんの携帯電話と腕時計の状態を見たとき、大きな疑問を抱いた。隆央さんは30mもの高さから転落したのに、携帯電話は電源が入ったままで傷ひとつなかつた。液晶もカメラもストラップもすべて何ひとつ壊れていない状態だった。

●携帯電話にはなぜか、二

警察は調査の大半を非開示にした理由について、(犯

罪行為を取扱うたは企図する者が対抗措置や防衛措置を講じ、証拠隠滅を図るなど、将来の捜査に支障が生じる恐れがあると認められるため」としているが、そもそも「自殺」と判断しておきながら「将来の捜査」という文言を出すこと自体、ナンセンスだ。

警察はなぜ“証拠”を頃かねるに隠し続けるのか。隆虫さんの死の背景には何があつたのか。取材を進めると、疑問点が次々と浮上した。私はバラバラになつた胸時計を遺族から預かり、老舗の時計修理専門店が軒を連ねる東京・上野・御徒町界隈で複数の時計職人に意見を求めてみた。すると、こんな答えが返ってきた。

うために使われた小道具ではないのか？

3年前、隆央さんの遺体を検案（注1）した医師に話を聞くことができた。

「警察からは『屋上の金網をよじ登って転落した。精神科に通っていて、その薬の副作用で自殺する可能性がある』と聞きました。普通、事件性があれば司法解剖するから、警察は私を呼

示を求め、民事裁判を起すことを決意した。

「なぜ、隆央の死に関する情報を見ることができないのか。私たちはまだ真実が知りたい一心だったのです」（真理子さん）

今年1月、名古屋地裁で一審の判決が下った。松並重雄裁判長は、「（捜査記録の）公開によって、将来の捜査などに支障が生じる恐れがあるとは認められないと」として、愛知県に対し、調書の開示を命じる全国でも類を見ない画期的な判決を下したのだ。しかし、それを不服とした被告側は控訴。現在も名古屋高裁で審理は続いている。

現場となった独身寮は写真奥の建物。隆央さんは手前に見える交番と寮の間の地面に転落していた

未解決の寮費盗難事件が起きていた

「警察が、早々に『自殺』として処理したのは、現場が警察独身寮だったこともあるでしょう。私が勤務した警察署では、独身寮での泥棒や寮費着服事件は頻繁に起きていました。しかし、例えば不祥事を知る人間たちを出世させる『榮転口封じ』などを行い、ほとんどが内々に処理されます。ですから警察内部で不祥事があつたとしても、積極的に捜査しようとしたためなかなか表沙汰にならない」

それでも、'06年には群馬県警の巡査が独身寮の光熱費代約80万円を着服したと告発され、横領容疑で逮捕され、そのまま書くしかない。それが今の検案の実情なのです」

いずれにせよ、警察はこうした背景もまったく調べることなく、短時間のうちに『自殺』という判断を下したことだけは間違いない。ちなみに、隆央さんの転落死から約2年後の07年9月、同じ独身寮から26歳の警察官が転落死し、即日「自殺」と判断されている。立て続けに同じ寮で事件が起きているのに、警察は隆央さんの件を再捜査する気配もない。愛知県警本部は15分という時間制限つきであったが、私の取材に応じた。対応した捜査第一課の戸鹿^{とが}島政晴次席は、こう切り出した。

注1) 検案とは遺体を医師が確認、死因を判断すること。警官が行う場合は検視と呼ぶ



塙央さんの遺品を前に取材
答える姉の博美さん(左)
真理子さん(右)

それ以上の徹底的な究明を行う余裕は、人員的にも予算的にもありません」
——事情はよくわかります。ただ早い段階で「自殺」と決めるのは危険では?
「というなら6000体すべてを解剖するべきですよ。でも、現実問題として難しい、どうしてもということになれば、承諾解剖（注2）という制度を使つてもらうしかないでしよう」
ちなみに、'07年、愛知県内で

「今日は自殺、転落死です。捜査に不備はありませんでした。遺族の方に説明はさせていただきました。死因に納得がいかなかつたとしでも、それは遺族の自由ですかね」

最後に次席は「日本のために頑張って下さい」と私に言い、席を立つた。15分の取材はあつという間に終わつたが、日本の死因究明システムが危険な状況にあることを、警察自身も強く認識していることが、ひしと伝わってきた。

警察統計によると、'06年中に自ら命を絶つた人は、3万2155人にのぼつてゐる。しかし、こうした数字を安易に信用してよいのだろうか。たとえば殺人の場合でも、事故や自殺に見えるよう現場の状況を取り

繕いさえすれば、忙しい警察を簡単に騙してしまってはいいだろうか。

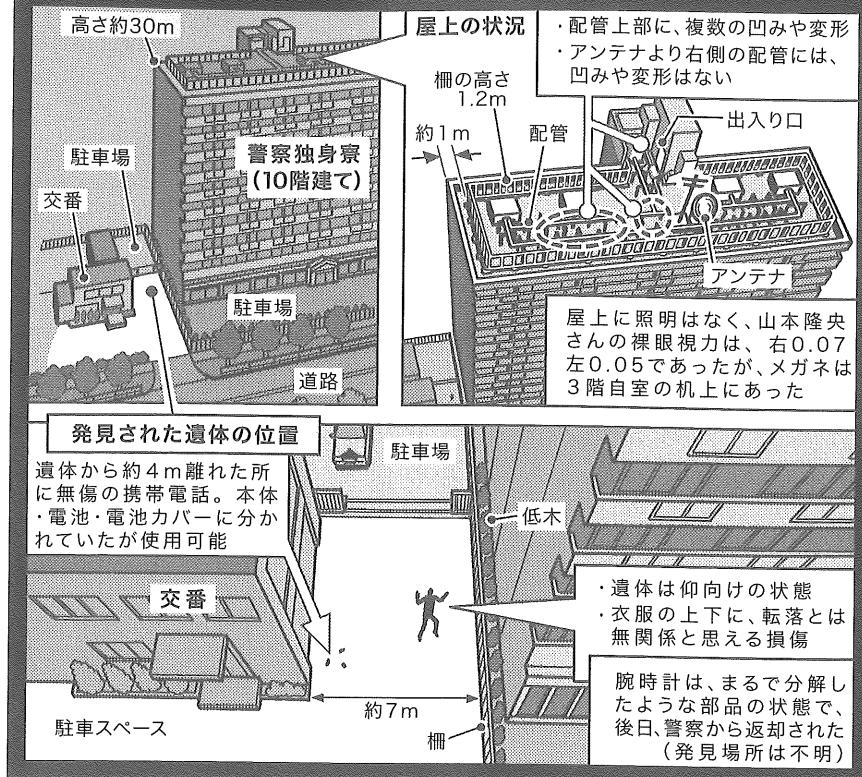
こうした事態を防ぐため、たとえばイギリスでは、「自殺」という判断を下す場合も、検視陪審という機関で長期間かけて審理されているという。

博美さん、真理子さん姉妹は語る。

「現場となつた独身寮の名前は『アブニール』、フランス語で『未来』です。隆央の未来が、こんなに悲しいかたちで突然に断絶してしまうとは、本人が一番理解できていなかつたことでしよう。どうか、家族の気持ちを汲み取つていただき、まずは自殺と判断した関係記録、現場や遺体の写真などを開示していただきたいと切に願います」

図版作製・吉岡昌諒
取材協力・横浜大輔

現場の状況



現場の状況、遺体の状況、関係者からの事情聴取など、
によって「犯罪に關係ないもの」と判断しています」
——司法解剖は行つたのですか？

——現場の状況だけで、百パーセント犯罪に関係ないとわかるのでしょうか？

「現場の状況や初動捜査、周辺捜査によって短時間で判明する場合があります」

——血液や胃の内容物など

は検査せずに？
「愛知県警では年間で約6000体も変死体を取り扱うわけです。それをすべて解剖しろといわれても、物理的に不可能ですよ。周辺捜査などによって犯罪性なしとする

として処理したのは、現場が警察独身寮だったこともあるでしょう。私が勤務した警察署では、独身寮での泥棒や寮費着服事件は頻繁に起きていました。しかし、例えば不祥事を知る人間たちを出世させる『榮転口封じ』などを行い、ほとんどが内々に処理されます。ですから警察内部で不祥事があつたとしても、積極的に捜査しようしないためなかなか表沙汰にならない

いずれにせよ、警察はこうした背景もまったく調べることなく、短時間のうちに『自殺』という判断を下したことだけは間違いない。ちなみに、隆央さんの転落死から約2年後の'07年9月、同じ独身寮から26歳の警察官が転落死し、即日「自殺」と判断されている。立て続けに同じ寮で事件が起きていているのに、警察は隆央さんの件を再捜査する気配もない。愛知県警本部は15分という時間制限つきであったが、私の取材に応じたが、対応した捜査第一課の戸鹿島政晴次席は、こう切り出した。

注1) 検案とは遺体を医師が確認、死因を判断すること。警官が行う場合は検視と呼ぶ

されている。また、'05年9月にはまさに愛知県警の巡回が独身寮で窃盗を繰り返し、懲戒免職処分を受けている。